

ARCS V1 管理者用マニュアル

Copyright © 2026 Antenna House, Inc. All rights reserved.

Antenna House is a trademark of Antenna House, Inc.

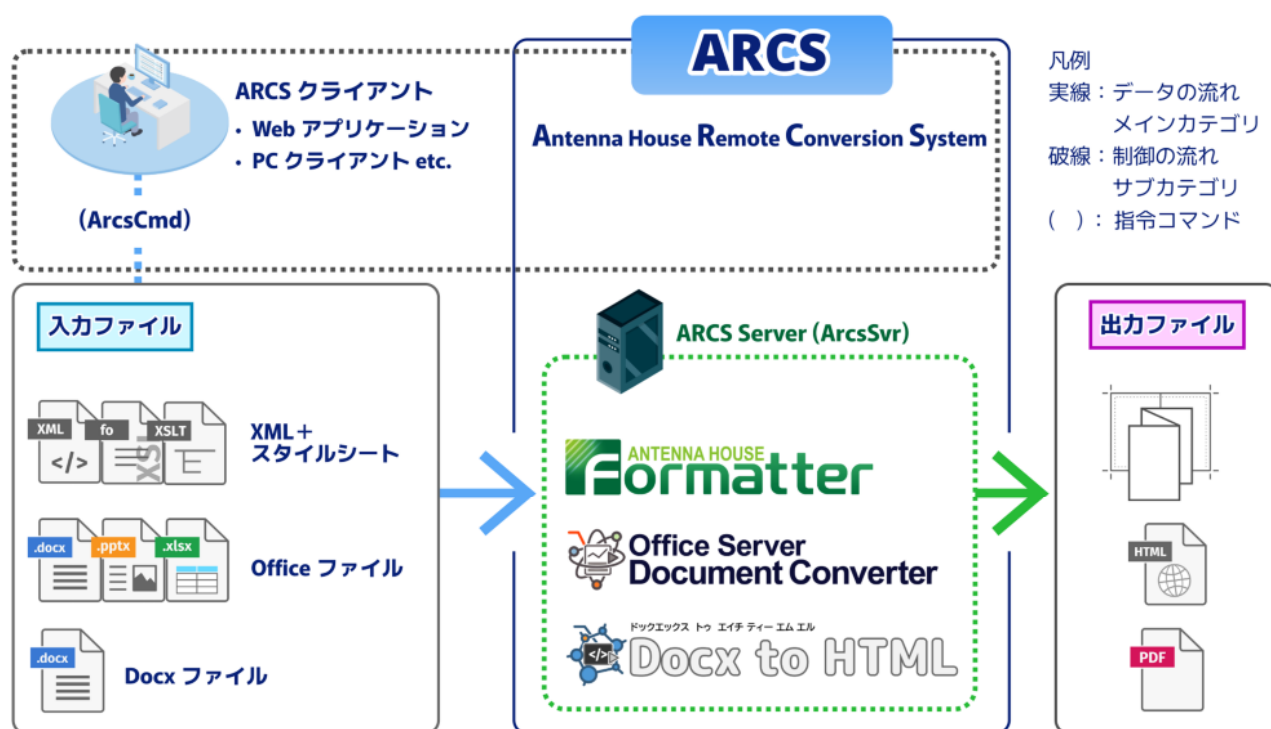


1. はじめに

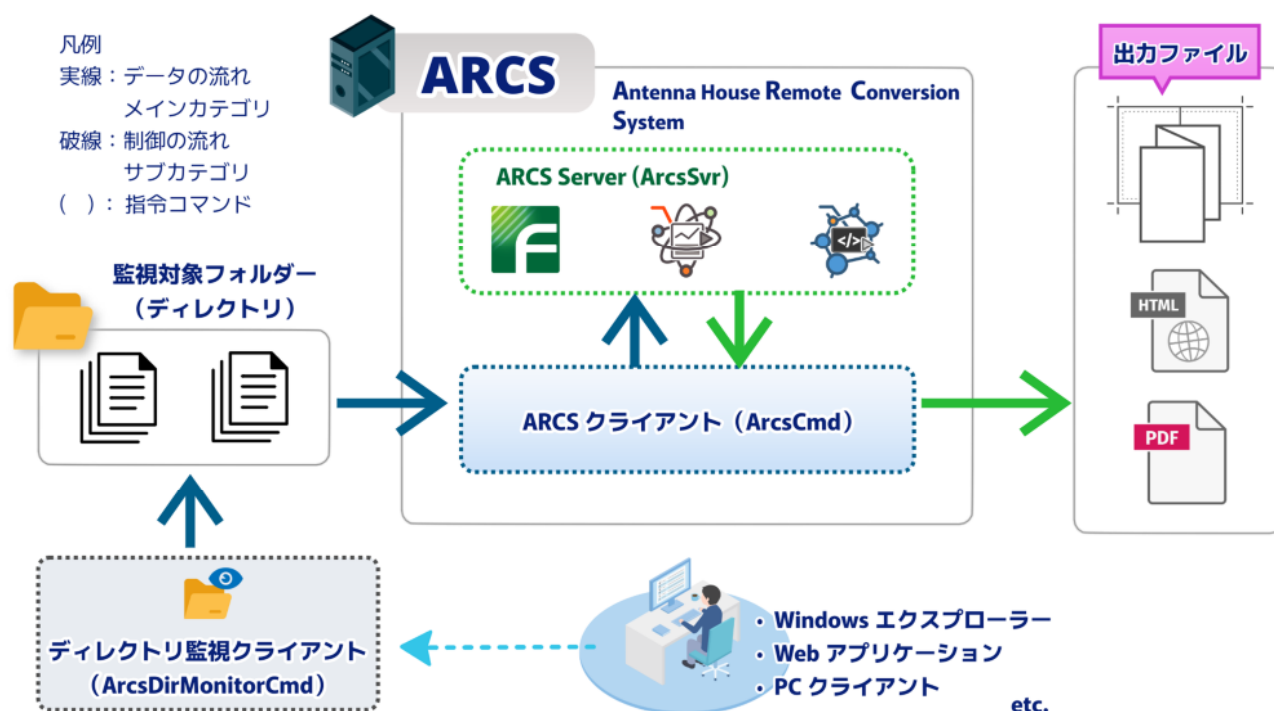
「Antenna House Remote Conversion System（以下、ARCS）」は、サーバーにインストールされたアンテナハウス製品、

- Antenna House Formatter（以下、Formatter）
- Office Server Document Converter（以下、OSDC）
- Docx to HTML（以下、DHC）

を、ネットワークを通じて、リモートのクライアントから実行するためのシステムです。



さらに、ARCS のディレクトリ監視ソフトを使うと、Windows のエクスプローラーで変換したい文書を、監視対象のフォルダ(ディレクトリ)にドラッグ・アンド・ドロップ（ドラッグ&ドロップ）するだけで、変換ができます。



ARCS を使うことで、次のようなメリットがあります。

- 前述のアンテナハウス製品を、遠隔から実行できます。
- 個々のクライアントにアンテナハウス製品をインストールする必要がないので、サーバーで集中管理できます。
- 管理の手間、コストが削減できます。
- ユーザは、ディレクトリ監視ソフトを使って、簡単に変換を実行できます。

本マニュアルは ARCS の管理者向けマニュアルです。

ARCS は、サーバーとクライアントに分かれています。

以下では、

- 動作環境
- セキュリティ上の留意事項
- 制限事項
- インストールとアンインストール
- ライセンスの設定
- 環境変数
- 起動と終了
- エラーと対処方法
- 設定ファイル
- カスタマイズ

などについて解説します。

1.1 用語

本マニュアルでは、以下の用語を使います。

ディレクトリ

Windows のフォルダと Linux のディレクトリの両方を意味します。

ターミナル

Windows のコマンドプロンプトと Linux のターミナルの両方を意味します。

ARCS 管理者

ARCS の管理を行うユーザ。

ARCS のインストール、設定、サーバーソフトの起動などが実行可能なユーザ。

ただし、ARCS の管理者ではあっても、システム（OS）の特権ユーザではなく、システム（OS）からみれば、一般ユーザであることに注意。

本マニュアルでは、arcs_admin と表記します。

ARCS 管理者グループ

ARCS 管理者のグループ。

本マニュアルでは、arcs_admin_group と表記します。

ARCS ユーザ

ARCS のクライアントソフトを実行するユーザ。

本マニュアルでは、arcs_user と表記します。

ARCS ユーザグループ

ARCS ユーザのグループ。

本マニュアルでは、arcs_user_group と表記します。

特権ユーザ、管理者ユーザ

システム（OS）の特権アカウント、管理者アカウントとも呼ばれるユーザ。

システム（OS）のユーザやグループの追加や削除、ディレクトリやファイルの作成や削除、所有者、アクセス権の変更ができるユーザ。

ARCS V1 管理者用マニュアル

Linux では、root ユーザや sudo できるユーザ。Windows では、Administrator。

一般ユーザ、非特権ユーザ、ユーザ

特権ユーザ、管理者ユーザではないユーザ。

アプリケーション

Formatter, OSDC, DHC など、サーバーで実行するアンテナハウス製品。

インポート

サーバーにディレクトリやファイルを取り込むこと。

クライアントからの視点では、サーバーにアップロードすること。

エクスポート

サーバーからディレクトリやファイルを取り出すこと。

クライアントからの視点では、サーバーからダウンロードすること。

1.2 お問い合わせ先

本製品の購入、機能、操作についての質問は、電子メールで次までお問い合わせください。

sis@antenna.co.jp

ヒント

本製品の Web マニュアルは、Microsoft Word で編集して、「Docx to HTML」で HTML に変換しました。

PDF のマニュアルは、同じ Word 文書から「Antenna House PDF Driver API」で PDF 出力しました。

目次

ARCS V1 管理者用マニュアル	1
1. はじめに.....	2
1.1 用語	4
1.2 お問い合わせ先	5
2. 動作環境.....	10
2.1 Windows 版	10
2.2 Linux 版	10
2.3 仮想環境.....	11
3. セキュリティ上の留意事項	12
4. 制限事項.....	14
4.1 ファイル名やディレクトリ名に使えない文字.....	14
4.2 ファイル名やディレクトリ名の最大長	14
4.3 インポートについて	14
4.4 エクスポートについて.....	14
4.5 変換元ファイル内のディレクトリやファイルの指定	14
4.6 インポートできる最大ファイル数、最大ファイルサイズ、最大トータルファイルサイズ	15
5. インストールとアンインストール.....	16
5.1 インストールする前に.....	16
5.2 インストール.....	16
5.2.1 Linux.....	16
5.2.2 Windows 版	17
5.3 アンインストール	18
6. ライセンス	20
6.1 評価版ライセンス	20
6.2 正規ライセンス	20
6.3 ライセンスファイルの設定	20
7. 環境変数.....	21

ARCS V1 管理者用マニュアル

7.1	サーバーソフトが使う環境変数	21
7.1.1	ARCS_HOME.....	21
7.1.2	ARCS_WS	21
7.1.3	PATH	22
7.2	クライアントソフトが使う環境変数.....	22
7.2.1	ARCS_HOME.....	22
7.2.2	PATH	22
7.3	ディレクトリ監視ソフトが使う環境変数	23
7.3.1	ARCS_HOME.....	23
7.3.2	ARCS_USER_NAME	23
7.3.3	PATH	23
7.3.4	ディレクトリ監視ソフト用追加オプション環境変数.....	24
7.3.5	変換オプション追加用環境変数.....	24
8.	起動と終了.....	25
8.1	サーバーソフト ArcsSvr.....	25
8.2	クライアントソフト ArcsCmd.....	25
8.3	ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd	26
9.	コマンドライン引数とオプション	28
9.1	サーバーソフト ArcsSvr.....	28
9.1.1	コマンドライン書式.....	28
9.1.2	コマンドライン引数とオプション	28
9.2	クライアントソフト ArcsCmd.....	28
9.2.1	コマンドライン書式.....	28
9.2.2	コマンドライン引数とオプション	29
9.3	ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd	31
9.3.1	コマンドライン書式.....	31
9.3.2	コマンドライン引数とオプション	31
10.	エラーと対処方法	32
10.1	ARCS のエラー	32

ARCS V1 管理者用マニュアル

10.2	アプリケーションのエラー	33
11.	設定ファイル	34
11.1	サーバーソフト ArcsSvr の設定ファイル	34
11.2	クライアントソフト ArcsCmd の設定ファイル	34
11.3	ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd 設定ファイル	35
12.	ログ	36
12.1	サーバーソフトのログ	36
12.2	クライアントソフトのログ	36
12.3	ディレクトリ監視ソフトのログ	36
12.3.1	セッションログ	37
13.	カスタマイズ	38
13.1	サーバーソフト ArcsSvr のカスタマイズ	38
13.1.1	ポート番号	38
13.1.2	TLS の設定	38
13.1.3	インポートできる最大ファイル数、最大ファイルサイズ、最大トータルファイルサイズ	38
13.2	クライアントソフト ArcsCmd のカスタマイズ	39
13.2.1	クライアントの設定をカスタマイズしたら	39
13.2.2	ホスト名、IP アドレス、ポート番号	39
13.2.3	TLS の設定	39
13.3	ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd のカスタマイズ	39
13.3.1	OSDC ではなく DHC を使う、あるいは、その逆	40
13.3.2	セッションログ	41
13.3.3	出力ディレクトリを変更する	41
13.3.4	ユーザ毎に出力ディレクトリを分ける	41
13.3.5	ユーザ毎に監視対象のディレクトリを分ける	42
13.3.6	セッション ID で出力ディレクトリを分ける	42
13.3.7	変換の種類別に監視対象のディレクトリを分ける	43
13.3.8	グループ毎に監視対象のディレクトリを分ける	43
13.3.9	あれこれ組み合わせる	43

ARCS V1 管理者用マニュアル

13.3.10 アプリケーションをローカルで実行	44
13.3.11 ネットワークで監視対象のディレクトリを共有して使う	44
13.3.12 クライアントマシンにインストールせずに使う	44
13.3.13 全部組み合わせると	44

奥付け	46
-----	----

2. 動作環境

2.1 Windows 版

対応 OS	Windows Server 2025 Windows Server 2022 Windows 11 メーカー側のサポートが終了した OS は、動作保証外となります。
CPU	上記 OS が正常に動作する Intel 系の CPU、および 100%互換性を持つプロセッサ
メモリ	上記 OS が推奨するメモリ以上（これに加えて 1GB 以上の空き容量を推奨）
ハードディスク	本製品のインストールに必要な 250MB 以上の空き容量
プログラミング言語	Go 1.25 でビルドされています。 一部は、Microsoft Visual C++ 2022 でビルドされています。 これらでビルドされたプログラムが動く環境が必要です。 Microsoft Visual C++ 2022 の ランタイムライブラリは、 <u>Microsoft Visual C++ 再頒布可能パッケージ</u> から入手可能です。

2.2 Linux 版

対応 OS	RockyLinux 9 以上 Alma Linux 9 以上 RedHat Enterprise Linux 9 以上は、Rocky Linux, AlmaLinux と互換性がある部分での動作保証になります。 メーカー側のサポートが終了した OS は、動作保証外となります。
-------	--

ARCS V1 管理者用マニュアル

CPU	上記 OS が正常に動作する Intel 系の CPU、および 100%互換性を持つプロセッサ
メモリ	上記 OS が推奨するメモリ以上（これに加えて 1GB 以上の空き容量を推奨）
ハードディスク	本製品のインストールに必要な 250MB 以上の空き容量
プログラミング言語	Go 1.25 でビルドされています。 一部は、GCC 11 でビルドされています。 これらでビルドされたプログラムが動く環境が必要です。

2.3 仮想環境

仮想環境で実行する場合、実環境上と同じ動作が保証されている場合のみ、動作保証します。

3. セキュリティ上の留意事項

認証機構について

プライベートネットワーク、オンプレミス環境での利用を想定している ARCS には認証機構がありません。

したがって、ARCS に直接、外部からのアクセス（パブリックアクセス）が可能な運用は避けてください。

外部からのアクセスが可能な環境で使う場合、必ず認証機構を ARCS の前段に設けて運用してください。

ARCS を管理するユーザとグループ

ARCS 管理者として、ARCS を管理し、サーバーソフトを実行する一般ユーザを作ってください。

本マニュアルでは、ARCS 管理者は、arcs_admin と表記します。

よりセキュリティを高めるためには、ARCS を管理するグループを作って、管理に参加する一般ユーザをグループに追加してください。このグループには特権ユーザは入れないでください。

本マニュアルでは、ARCS 管理者グループは、arcs_admin_group と表記します。

サーバーソフトを実行するユーザ

ARCS サーバーソフトは、特権ユーザではなく、一般ユーザで実行してください。

本マニュアルでは、arcs_admin になります。

セキュリティポリシーによっては、特権ユーザが含まれていない arcs_admin_group に実行兼を与えることもあるでしょう。

クライアントソフトを実行するユーザとグループ

ARCS クライアントソフトは、どのユーザでも実行できるようにしてもいいですが、よりセキュリティを高めるには、クライアントソフトを実行できるグループを作り、そのグループに所属するユーザしか実行できないようにしてください。

本マニュアルでは、クライアントソフトを実行するユーザを arcs_user, グループを arcs_user_group と表記します。

制限事項

主にセキュリティ上の理由により、制限があります。

詳しくは、「制限事項」を参照してください。

4. 制限事項

4.1 ファイル名やディレクトリ名に使えない文字

Linux と Windows のディレクトリやファイルを同じに扱うために、また、セキュリティ上の理由により、以下の文字は、変換元や変換先のパス名の最後の要素であるファイル名やディレクトリ名には使えません。

¥ / : * ? " < > | ; ()

4.2 ファイル名やディレクトリ名の最大長

Linux と Windows のディレクトリやファイルを同じに扱うために、また、セキュリティ上の理由により、変換元や変換先のパス名の最後の要素であるファイル名やディレクトリ名の最大長は、127 バイトです。

4.3 インポートについて

セキュリティ上の理由により、アプリケーションの変換元指定で、パスの最後の要素がディレクトリだった場合、サーバーにインポートされるのは、そのディレクトリ直下のファイルのみです。さらにディレクトリを下降して、ディレクトリやファイルをインポートすることはありません。

4.4 エクスポートについて

セキュリティ上の理由により、サーバーからエクスポートされるのは、変換先ファイルと、サーバー上で、そのファイルと同じディレクトリにあるディレクトリのみです。さらにディレクトリを下降して、ディレクトリやファイルをエクスポートすることはありません。

4.5 変換元ファイル内のディレクトリやファイルの指定

セキュリティ上の理由により、サーバーにインポートされた変換元ファイル内で、変換元ファイルがあるディレクトリより上のディレクトリやファイル、別のディレクトリやファイルを参照するものは、使えません。

例えば、Formatter の XSL-FO で、

```
<fo:external-graphic src="url('../img/image.png')"/>
```

という指定は、変換時に参照するディレクトリやファイルがサーバーにインポートされていないため、エラーになります。

この場合、XSL-FO の

```
<fo:external-graphic src="url('../img/image.png')" />
```

を

```
<fo:external-graphic src="url('image.png')" />
```

と修正します。

そして、image.png をサーバー上の変換元ファイルと同じディレクトリにインポートするため、ArcsCmd の -arcs-data オプションを使います。

```
ArcsCmd -arcs-data C:\my-images\img\image.png AHFCmd -d my.fo -o my.pdf
```

-arcs-data の詳細については、クライアントソフトの「コマンドライン引数とオプション」を参照してください。

ディレクトリ監視ソフトを使う場合、あらかじめ、-arcs-data オプションを環境変数で設定しておく必要があります。

詳しくは、「ディレクトリ監視ソフトが使う環境変数」の「ディレクトリ監視ソフト用追加オプション環境変数」を参照してください。

4.6 インポートできる最大ファイル数、最大ファイルサイズ、最大トータルファイルサイズ

セキュリティ上の理由により、インポートできる最大ファイル数、最大ファイルサイズ、最大トータルファイルサイズには制限があります。

これは、サーバーソフトの設定ファイル ArcsSvt.yaml の設定で変更できます。

詳しくは、「サーバーソフト ArcsSvr の設定ファイル」や「サーバーソフト ArcsSvr のカスタマイズ」を参照してください。

5. インストールとアンインストール

5.1 インストールする前に

インストールするディレクトリをどこにするか、ディレクトリやファイルのアクセス権はどうするかといった、セキュリティに関するものについては、実際には、ARCS を利用する組織（企業や団体）のセキュリティポリシーにしたがってください。

ここでは、ARCS 管理ユーザとして、arcs_admin, ARCS 管理グループとして、arcs_admin_group, ARCS ユーザとして、arcs_user, ARCS ユーザグループとして、arcs_user_group がすでにあるものとして、インストールの一例を示します。

サーバーソフトを実行する arcs_admin は、「用語」で説明したように、ARCS の管理者ではあっても、システム（OS）の特権ユーザではなく、システム（OS）からみれば、一般ユーザであることに注意してください。

ユーザやグループの作成、変更、オーナーやグループの設定、アクセス権の設定については、本マニュアルでは解説しませんので、各 OS の書籍やインターネット上の解説を参照してください。

5.2 インストール

5.2.1 Linux

5.2.1.1 管理者用インストール

特権ユーザとしてログイン、あるいは sudo して、アーカイブファイル

日本語版：ARCS-ja-admin-Linux-X86-64-XXXXXXXXX.tar.gz

XXXXXXXXX の部分は年月日 20260101 など

または、

英語版：ARCS-en-admin-Linux-X86-64-XXXXXXXXX.tar.gz

XXXXXXXXX の部分は年月日 20260101 など

を展開してください。

インストールするディレクトリは、ARCS を利用する組織（企業や団体）のセキュリティポリシーにしたがってください。

ここでは、/opt/ARCS にインストールしたと仮定すると、以下のディレクトリ構造になります。

/opt/ARCS	ARCS のホームディレクトリ。ここを ARCS_HOME に設定する
/opt/ARCS/client	ARCS クライアントソフトのディレクトリ
/opt/ARCS/client/bin	プログラム
/opt/ARCS/client/certs	TLS の証明書を入れる場所

ARCS V1 管理者用マニュアル

/opt/ARCS/client/conf 設定ファイルがある場所
/opt/ARCS/client/conf/apps アプリケーションの設定ファイルがある場所
/opt/ARCS/client/scripts アプリケーション実行用のスクリプトがある場所
/opt/ARCS/server ARCS サーバソフトのディレクトリ
/opt/ARCS/server/bin ARCS クライアントのプログラム
/opt/ARCS/server/certs TLS の証明書を入れる場所
/opt/ARCS/server/conf 設定ファイルがある場所

アクセス権の設定は、ARCS を利用する組織（企業や団体）のセキュリティポリシーにしたがってください。

ここでは、一例を示します。

/opt/ARCS ディレクトリとその下位ディレクトリ、および、そこにあるファイルは、
オーナーが arcs_admin,
グループが arcs_admin_group
アクセス権は、

arcs_admin が読み書き実行可能

arcs_admin_group が読み書き実行可能、あるいは、読みと実行可能
にしてください。

セキュリティを高めるには、その他のユーザは、読み書き実行が不可能にしてください。

5.2.1.2 一般ユーザ用インストール

一般ユーザ用インストールについては、「一般ユーザ用マニュアル」のインストールを参照してください。

5.2.2 Windows 版

5.2.2.1 管理者用インストール

特権ユーザとしてログインして、アーカイブファイル

日本語版：ARCS-ja-admin-Windows-X86-64-XXXXXXXXX.zip

XXXXXXXXX の部分は年月日 20260101 など

または、

英語版：ARCS-en-admin-Windows-X86-64-XXXXXXXXX.zip

XXXXXXXXX の部分は年月日 20260101 など

を展開してください。

インストールするディレクトリは、ARCS を利用する組織（企業や団体）のセキュリティポリシーにしたがってください。

ここでは、C:\ARCS にインストールしたと仮定すると、以下のディレクトリ構造になります。

ARCS V1 管理者用マニュアル

C:\%ARCS	ARCS のホームディレクトリ。ここを ARCS_HOME に設定する
C:\%ARCS%\client	ARCS クライアントソフトのディレクトリ
C:\%ARCS%\client\bin	プログラム
C:\%ARCS%\client%\certs	TLS の証明書を入れる場所
C:\%ARCS%\client%\conf	設定ファイルがある場所
C:\%ARCS%\client%\conf%\apps	アプリケーションの設定ファイルがある場所
C:\%ARCS%\client%\scripts	アプリケーション実行用のスクリプトがある場所
C:\%ARCS%\server	ARCS サーバソフトのディレクトリ
C:\%ARCS%\server%\bin	ARCS クライアントのプログラム
C:\%ARCS%\server%\certs	TLS の証明書を入れる場所
C:\%ARCS%\server%\conf	設定ファイルがある場所

アクセス権の設定は、ARCS を利用する組織（企業や団体）のセキュリティポリシーにしたがってください。

このディレクトリと下位ディレクトリ、および、そこにあるファイルは、

オーナーが arcs_admin,

グループが arcs_admin_group

アクセス権は、

arcs_admin が読み書き実行可能

arcs_admin_group が読み書き実行可能、あるいは、読みと実行可能

にしてください。

セキュリティを高めるには、その他のユーザは、読み書き実行が不可能にしてください。

5.2.2.2 一般ユーザ用インストール

一般ユーザ用インストールについては、「一般ユーザ用マニュアル」のインストールを参照してください。

5.3 アンインストール

インストールディレクトリ以下を削除してください。

サーバソフトのアンインストールでは、環境変数 ARCS_HOME, ARCS_WS を削除してください。

クライアントソフト、ディレクトリ監視ソフトのアンインストールでは、環境変数 ARCS_HOME を削除してください。

ディレクトリ監視ソフトで指定した監視対象のディレクトリを削除する場合、その下に、

- 処理に失敗したファイルが入る error-dir
- 処理に成功したファイルが入る success-dir
- out_pdf など出力先ディレクトリ

ARCS V1 管理者用マニュアル

がある場合は、念のため、ファイルを退避してから、監視対象のディレクトリを削除するほうが無難です。

6. ライセンス

6.1 評価版ライセンス

初期状態のライセンスは、評価版のライセンスです。評価版の使用期間は 30 日間です。

ARCS のライセンスが、評価版ライセンスの間は、変換に使うアプリケーションのライセンスが正規ライセンスであっても、アプリケーションは評価版として動きます。

6.2 正規ライセンス

本製品を購入された場合、正規ライセンス（ライセンスファイル）とライセンス証書が提供されます。

ライセンスについては、アンテナハウスの

<https://www.antenna.co.jp/purchase/license-sys.html>

ライセンス案内

をご覧ください。

6.3 ライセンスファイルの設定

ライセンスファイル名は「arcs.lic」です。

インストールディレクトリが、

Linux では、/opt/ARCS

Windows では、C:¥ARCS

だとすると、ARCS 直下にあります。

Linux では、

ARCS/arcs.lic

Windows では、

ARCS¥arcs.lic

にあります。

そこに、正規ライセンスファイルをコピーしてください。

7. 環境変数

7.1 サーバーソフトが使う環境変数

サーバーでの Formatter, OSDC, DHC の実行には、run.sh を使わず、かつ、絶対パスではなく、AHFCmd, SBCCmd, DHCCmd だけで実行できるように、それぞれの環境変数や PATH を設定してください。

設定する環境変数については、各アプリケーションのマニュアルを参照してください。

Fomatter のオンラインマニュアル

Formatter のオンラインマニュアル：環境変数

OSDC のオンラインマニュアル

OSDC のオンラインマニュアル：環境変数

DHC のオンラインマニュアル

DHC のオンラインマニュアル：環境変数

7.1.1 ARCS_HOME

インストールディレクトリの絶対パスを設定してください。

このディレクトリ以下は、サーバーソフトを実行するユーザが読み書き実行が可能なアクセス権にしてください。

Linux の例

/opt/ARCS

Windows の例

C:\ARCS

7.1.2 ARCS_WS

サーバーでの作業用に使うディレクトリの絶対パスを指定してください。

このディレクトリ以下は、サーバーソフトを実行するユーザが読み書き実行が可能なアクセス権にしてください。

Linux の例

/opt/ARCS/ARCS_WS

Windows の例

C:\ARCS\ARCS_WS

【重要】 同じマシンで、サーバーを複数起動する場合は、必ず違うディレクトリを指定してください。

7.1.3 PATH

インストールディレクトリが、

Linux では、/opt/ARCS

Windows では、C:¥ARCS

だとすると、

Linux では、

/opt/ARCS/server/bin

Windows では、

C:¥ARCS¥server¥bin

を PATH に追加してください。

Windows では、システム環境変数ではなく、ユーザ環境変数の PATH に、追加してください。

7.2 クライアントソフトが使う環境変数

7.2.1 ARCS_HOME

インストールディレクトリの絶対パスを設定してください。

このディレクトリ以下は、クライアントソフトを実行するユーザが読み書き実行が可能なアクセス権にしてください。

Linux の例

/opt/ARCS

Windows の例

C:¥ARCS

7.2.2 PATH

インストールディレクトリが、

Linux では、/opt/ARCS

Windows では、C:¥ARCS

だとすると、

Linux では、

/opt/ARCS/client/bin

Windows では、

C:¥ARCS¥client¥bin

を PATH に追加してください。

Windows では、システム環境変数ではなく、ユーザ環境変数の PATH に、追加してください。

7.3 ディレクトリ監視ソフトが使う環境変数

7.3.1 ARCS_HOME

インストールディレクトリの絶対パスを設定してください。

このディレクトリ以下は、ディレクトリ監視ソフトを実行するユーザが読み書き実行が可能なアクセス権にしてください。

Linux の例

/opt/ARCS

Windows の例

C:¥ARCS

7.3.2 ARCS_USER_NAME

変換結果の出力をユーザ毎に分けたいときに使います。通常は設定する必要はありません。

7.3.3 PATH

インストールディレクトリが、

Linux では、/opt/ARCS

Windows では、C:¥ARCS

だとすると、

Linux では、

/opt/ARCS/client/bin

Windows では、

C:¥ARCS¥client¥bin

を PATH に追加してください。

Windows では、システム環境変数ではなく、ユーザ環境変数の PATH に、追加してください。

7.3.4 ディレクトリ監視ソフト用追加オプション環境変数

ディレクトリ監視ソフトを実行するときに使える、追加オプションの環境変数を用意しています。

ARCS_OPT, ARCS_OPT1, ARCS_OPT2, ARCS_OPT3 の 4 系統を用意しています。

必要に応じて、ディレクトリ監視ソフトを実行する前に設定しておいてください。

オプションの名前用

ARCS_OPT_NAME, ARCS_OPT1_NAME, ARCS_OPT2_NAME, ARCS_OPT3_NAME

オプションの値用

ARCS_OPT_VALUE, ARCS_OPT1_VALUE, ARCS_OPT2_VALUE, ARCS_OPT3_VALUE

典型的な使い方は、-arcs-data オプションの設定に使います。

変換に使う画像ファイルをあらかじめインポートする場合、C:¥data¥img ディレクトリに画像ファイルがあるとして、

```
set ARCS_OPT_NAME=-arcs-data
```

```
set ARCS_OPT_VALUE=C:¥data¥img
```

で、環境変数を設定して、ディレクトリ監視ソフトを起動すれば、ArcsCmd に

```
-arcs-data C:¥data¥img
```

を指定して、変換することになります。

7.3.5 変換オプション追加用環境変数

アプリケーションを実行するとき、変換オプションを追加するための環境変数を用意しています。

必要に応じて、ディレクトリ監視ソフトを実行する前に設定しておいてください。

- Formatter 用は、ArcsAHFCmdOpts
- OSDC 用は、ArcsSBCCmdOpts
- DHC 用は、ArcsDHCCmdOpts

です。

8. 起動と終了

8.1 サーバースoftware ArcsSvr

サーバースoftwareを起動するには、ターミナルを起動して、ARCS のサーバーの環境変数を設定して、

```
ArcsSvr start
```

で、起動します。

サーバースoftwareを終了するには、サーバーを起動したターミナルとは別に、新しくターミナルを開いて、ARCS のサーバーの環境変数を設定して、

```
ArcsSvr stop
```

で、終了します。

複数のサーバースoftwareを起動する場合は、新しくターミナルを起動して、ARCS のサーバーの環境変数を設定します。そのとき、環境変数 ARCS_WS には、それまで起動しているサーバースoftwareの ARCS_WS に設定したディレクトリとは違うディレクトリを設定します。そして、

```
ArcsSvr start
```

で、起動します。

8.2 クライアントソフト ArcsCmd

クライアントソフトを実行するには、ターミナルを起動して、ARCS のクライアントの環境変数を設定します。

起動するには、ArcsCmd の後に、アプリケーションのコマンドと引数を並べるだけです。

次は、アプリケーションのコマンドと引数の指定例です。

```
ArcsCmd AHFCmd -d foo.fo -o foo.pdf @PDF  
ArcsCmd SBCCmd -d foo.docx -o foo.pdf -p @PDF  
ArcsCmd DHCCmd -d foo.docx -o foo.html
```

クライアントソフトには、特別な終了操作はありません。実行すると、ARCS のサーバーに変換処理を依頼して、結果を受け取って終了します。

8.3 ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd

ディレクトリ監視ソフトを起動するには、新しくターミナルを起動して、ARCS のクライアントの環境変数を設定して、監視したいディレクトリに移動して、

```
ArcsDirMonitorCmd start
```

で、起動します。

複数のディレクトリ監視ソフトを起動するには、新しくターミナルを起動して、ARCS のディレクトリ監視ソフトの環境変数を設定します。

それまで起動しているディレクトリ監視ソフトとは違うディレクトリに移動して、

```
ArcsDirMonitorCmd start
```

で、起動します。

設定ファイルを指定したり、監視対象のディレクトリを指定できます。

次に示すのは、Word の文書を OSDC で変換する設定ファイル `dirmon_osdc.yaml` と DHC で変換する `dirmon_dhc.yaml` を用意して、OSDC で変換するディレクトリと HDC で変換するディレクトリを指定する例です。

OSDC で変換する例

```
ArcsDirMonitorCmd -config %dirmon_conf%dirmon_osdc.yaml -dir C:%watch%OSDC
```

DHC で変換する例

```
ArcsDirMonitorCmd -config %dirmon_conf%dirmon_dhc.yaml -dir C:%watch%DHC
```

監視がスタートしたら、あとは、監視対象のディレクトリに、変換したいファイルを、コピーするか移動するだけです。

ターミナルを起動して、コマンドラインで、コピーや移動することもできますが、Windows では、Windows エクスプローラーで、ドラッグ・アンド・ドロップ（ドラッグ&ドロップ）するのが簡単です。

ARCS V1 管理者用マニュアル

ディレクトリ監視ソフトを終了するには、新しくターミナルを起動して、ARCS のクライアントの環境変数を設定して、監視したいディレクトリに移動して、

```
ArcsDirMonitorCmd stop
```

で、終了します。

あるいは、-dir で監視対象ディレクトリを絶対パスで指定して終了します。

```
ArcsDirMonitorCmd stop -dir C:¥watch¥OSDC
```

で、終了します。

もっと簡単にディレクトリ監視ソフトを終了するには、Ctrl-C などコマンドを終了するキーを押すか、ターミナルを終了します。

【重要】

実際に変換が実行されるのは、監視対象のディレクトリに、ファイルが作られたときです。上書きやリネームでは実行されないことに注意してください。

変換したいファイルと同じ名前のファイルが、監視対象のディレクトリにある場合は、それを削除してから、変換したいファイルのコピーや移動をしてください。

初期設定では、

- 変換に成功したファイルは、監視対象ディレクトリの success_dir に入ります。
- 変換に失敗したファイルは、監視対象ディレクトリの error_dir に入ります。
- 変換結果の PDF ファイルは、監視対象ディレクトリの out_pdf に入ります。
- 変換結果の PNG ファイルは、監視対象ディレクトリの out_png に入ります。
- 変換結果の JPG ファイルは、監視対象ディレクトリの out_jpeg に入ります。
- 変換結果の TIFF ファイルは、監視対象ディレクトリの out_tiff に入ります。
- 変換結果の MTIFF ファイルは、監視対象ディレクトリの out_mtiff に入ります。
- 変換結果の SVG ファイルは、監視対象ディレクトリの out_svg に入ります。
- 変換結果の HTML ファイルは、監視対象ディレクトリの out_html に入ります。

9. コマンドライン引数とオプション

9.1 サーバソフト ArcsSvr

9.1.1 コマンドライン書式

グローバルオプションは、ArcsSvr の直後から、start や stop の前に指定するオプションです。

```
ArcsSvr [global options...] start or stop
```

9.1.2 コマンドライン引数とオプション

-, -, -v は、start や stop の前に指定するグローバルオプションです。

オプションや引数	説明
-, -h	ヘルプを表示します。
-v	バージョン情報とライセンスファイルの情報を表示します。
start	サーバーを起動します。
stop	サーバーを終了します。

9.2 クライアントソフト ArcsCmd

9.2.1 コマンドライン書式

グローバルオプションは、ArcsCmd 直後から、アプリケーションのコマンド (application_command) の前に指定するオプションです。

```
ArcsCmd [options...] application_command application_command_args
```

9.2.2 コマンドライン引数とオプション

-?, -h, -v, -arcs-data, -arcs-mkdir は、アプリケーションのコマンドの前に指定するグローバルオプションです。

オプションや引数	説明
-?や-h	ヘルプを表示します。
-v	バージョン情報とライセンスファイルの情報を表示します。
-arcs-data	変換に必要なデータをサーバーにインポートします。
-arcs-mkdir	変換に必要なディレクトリをサーバー上に作成します。
アプリケーションのコマンド	アプリケーションを実行するコマンド。AHFCmd, SBCCmd, DHCCmd など。
アプリケーションの引数	アプリケーションに渡す引数。

-arcs-data は、変換に必要なデータをサーバーにインポートするときに使います。何回でも指定できます。

制限事項の「変換元ファイル内のディレクトリやファイルの指定」や「ディレクトリ監視ソフトが使う環境変数」の「ディレクトリ監視ソフト用追加オプション環境変数」も参照してください。

次の例は、AHFCmd の変換元 my.fo の中に、image.png を参照する指定があるという想定です。

クライアントマシンにあるファイル C:¥my-images¥image.png をサーバー上の変換元ファイルと同じディレクトリにインポートするために使っています。

制限事項の「変換元ファイル内のディレクトリやファイルの指定」で述べたように、XSL-FO の修正が必要になる場合もあります。

```
ArcsCmd -arcs-data ¥my-images¥image.png AHFCmd -d my.fo -o my.pdf
```

変換に必要なデータが多数あるときは、クライアントマシンの特定ディレクトリにそれらを集めて、1つの-arcs-data オプションで、そのディレクトリを丸ごとインポートする方法もあります。

次の例は、AHFCmd の変換元 my.fo の中に、多数の画像を参照する指定があるという想定です。

画像をクライアントマシンの C:¥my-images¥many-images ディレクトリに集めて、サーバにインポートするために使っています。

インポートすると、ARCS サーバーが管理しているディレクトリの下に、many-images ディレクトリが作られ、その下に多数の画像ファイルが作られます。

ARCS V1 管理者用マニュアル

XSL-FO では、many-images¥image1.png, many-images¥image2.png のように、many-images ディレクトリを付けた相対パスで、画像ファイルにアクセスする必要があります。したがって、XSL-FO の修正が必要になる場合もあります。

```
ArcsCmd -arcs-data C:¥my-images¥many-images AHFCmd -d my.fo -o my.pdf
```

毎回、多数の画像ファイルなど、変換に必要なものをサーバーにインポートするのを省略したい場合、-arcs-data を使わない方法もあります。

あらかじめ、ARCS とは関係なく、サーバー上に必要なものを配置しておきます。

FO では、サーバー上の絶対パスを指定して、必要なものにアクセスします。

Formatter V7.5 から、

```
<fo:external-graphic src="file:///C:/my-images/image.png"/>
```

のように、絶対パスを指定できるようになりました。

詳しくは、Formatter 技術的資料の URI

<https://www.antenna.co.jp/AHF/help/ja/ahf-tech.html#URI>

を参照してください。

ただし、これは、セキュリティ上は好ましくないもので、推奨はしません。組織（企業や団体）のセキュリティポリシーが、サーバー上のいろいろな場所にあるファイルにアクセスするのを許している場合にのみ、使える方法です。

-arcs-mkdir は、変換に必要なディレクトリをサーバー上に作ります。何回でも指定できます。

次の例は、OSDC の変換で、SVG の出力先ディレクトリが必要なので、使っています。

```
ArcsCmd -arcs-mkdir svg-image SBCCmd -d my.pdf -o my.svg -p @SVG -svgip 1
```

OSDC V10 からは、OSDC 自身に SVG のディレクトリを作る、-svgicp オプションが追加されたので、-arcs-mkdir を使う必要はなくなりました。

```
ArcsCmd SBCCmd -d my.pdf -o my.svg -p @SVG -svgip 1 -svgicp svg-image
```

9.3 ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd

9.3.1 コマンドライン書式

グローバルオプションは、ArcsDirMonitorCmd の直後から、start や stop の前に指定するオプションです。

`ArcsDirMonitorCmd [global options...] start [options...] or stop [options...]`

9.3.2 コマンドライン引数とオプション

-?, -h, -v は、start や stop の前に指定するグローバルオプションです。

オプションや引数	説明
-?や-h	ヘルプを表示します。
-v	バージョン情報とライセンスファイルの情報を表示します。
start	ARCS ディレクトリ監視ソフトを起動します。
stop	ARCS ディレクトリ監視ソフトを終了します。

start と stop には、さらにオプションがあります。

オプションや引数	説明
-config	設定ファイルを指定します。
-dir	監視するディレクトリを指定します。

10. エラーと対処方法

エラーは、ARCS のエラーとアプリケーションのエラーに大別できます。

ARCS のエラーの多くは、通信に関するものです。

アプリケーションのエラーの多くは、アプリケーションのコマンドライン引数が間違っています。

エラーメッセージは多岐にわたるので、一部を紹介します。

エラーメッセージも、一部だけを抜粋しています。

10.1 ARCS のエラー

ARCS で発生する代表的なエラーです。

サーバーが動いていないとき

エラーメッセージ

No connection could be made because the target machine actively refused it.

エラーの原因

ARCS サーバーが動いていない。

対処法

ARCS サーバーを起動してください。

タイムアウトしたとき

エラーメッセージ

deadline exceeded

エラーの原因

巨大なファイル、サーバーマシンのメモリやパワーが足りないときに発生しがちです。

対処法

ARCS 管理者は、サーバーマシン上で、ARCS を使わずに、直接アプリケーションを実行して問題を調べてください。

その結果によって、サーバー設定ファイルの `exec_timeout` の値を調整してください。

ファイルが見つからないとき

エラーメッセージ

could not import. file or directory does not exist

エラーの原因

主に変換元の入力ファイルが見つからず、インポートできないときのエラーです。

変換元ファイル以外にも、アプリケーションのコマンドラインに、
存在しない設定ファイルや CSS ファイルを指定したときにも発生します。
ファイルのある場所の間違い、ファイル名の間違いが大半です。

対処法

存在するファイルを指定してください。

サポートしていないアプリケーションを使おうとしたとき

エラーメッセージ

could not convert rpc error: code = Unknown desc = exec: "osdc": executable file not found

対処法

例えば、OSDC を使おうとして、SBCCmd ではなく、OSDC とする失敗例があります。
アプリケーションの正しいコマンド名を使ってください。

10.2 アプリケーションのエラー

アプリケーションのエラーの多くは、アプリケーションに渡すコマンドライン引数やオプションが間違っている場合に発生します。

アプリケーションのエラーメッセージは、ターミナル画面では、アプリケーションの
標準出力の部分（execCmd: stdout: === begin==から、execCmd: stdout: === end ==まで）
か

標準エラー出力の部分（execCmd: stderr: === begin==から、execCmd: stderr: === end ==まで）
に出ます。

正しい引数やオプションを指定しているか、見直してください。

エラーメッセージが出たときは、クライアントソフト ArcsCmd を使わず、アプリケーション単体
(AHFCmd, SBCCmd, DHCCmd)で実行するのも、有効なエラー発見方法です。

アプリケーション単体のコマンドラインに引数を指定して実行し、エラーが起きるかどうか試してください。単体でエラーが起きれば、ARCS のエラーではなく、アプリケーションの引数が間違っています。

ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd で発生するエラーでは、セッションログを使うのも、有効なエラー発見方法です。

詳しくは、「セッションログ」を参照してください。

11. 設定ファイル

ARCS の設定ファイルは、いずれも YAML 形式です。

サーバソフト ArcsSvr の設定ファイルは、ArcsSvr.yaml です。

クライアント ArcsCmd の設定ファイルは、ArcsCmd.yaml です。

ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd の設定ファイルは、ArcsDirMonitorCmd.yaml です。

これらの設定を、実際の運用環境に合わせて、変更してください。

カスタマイズの例は、「カスタマイズ」にあります。

カスタマイズしたら、カスタマイズした設定ファイル ArcsCmd.yaml や ArcsDirMonitorCmd.yaml を ARCS ユーザに配って、設定が反映されるようにしてください。

11.1 サーバソフト ArcsSvr の設定ファイル

サーバソフト ArcsSvr の設定ファイルは、インストールディレクトリが ARCS だとすると、Linux では、

ARCS/server/conf/ArcsSvr.yaml

Windows では、

ARCS%server%conf%ArcsSvr.yaml

にあります。

内容の詳しい説明は、ArcsSvr.yaml に書いてあるので、そちらを参照してください。

同じマシンで複数のサーバソフトを実行する場合は、ポート番号を変更する必要があります。

環境変数 ARCS_WS も別のディレクトリを指定する必要があります。

サーバーのポート番号をカスタマイズしたら、忘れずに、クライアントソフト設定ファイル

ArcsCmd.yaml のポート番号も変更し、ArcsCmd.yaml を ARCS ユーザに配って、設定が反映されるようにしてください。

11.2 クライアントソフト ArcsCmd の設定ファイル

クライアントソフト ArcsCmd の設定ファイルは、インストールディレクトリが ARCS だとすると、Linux では、

ARCS/client/conf/ArcsCmd.yaml

Windows では、

ARCS%client%conf%ArcsCmd.yaml

にあります。

内容の詳しい説明は、ArcsCnd.yaml に書いてあるので、そちらを参照してください。

サーバーソフトを実行するホスト名（初期設定は localhost）や IP アドレスは、カスタマイズする場合があります。

カスタマイズしたら、設定ファイル ArcsCmd.yaml を ARCS ユーザに配って、設定が反映されるようにしてください。

11.3 ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd 設定ファイル

ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd の設定ファイルは、インストールディレクトリが ARCS だとすると、

Linux では、

ARCS/client/conf/ArcsDirMonitorCmd.yaml

Windows では、

ARCS¥client¥conf¥ArcsDirMonitorCmd.yaml

にあります。

内容の説明は、ArcsDirMonitorCmd.yaml に書いてあるので、そちらを参照してください。

カスタマイズしたら、設定ファイル ArcsDirMonitorCmd.yaml を ARCS ユーザに配って、設定が反映されるようにしてください。

12. ログ

ログファイルは大量にできて、ディスクを圧迫することがあるので、必要に応じて、削除、圧縮、移動などして適切に管理してください。

12.1 サーバーソフトのログ

サーバーソフト ArcsSvr のログは、環境変数 ARCS_WS で指定したディレクトリが ARCS_WS だとすると、

Linux では、

ARCS_WS/logs

Window では、

ARCS_WS¥logs

にあります。

12.2 クライアントソフトのログ

クライアントソフト ArcsCmd のログは、ログファイルには書き込まれません。

ターミナル画面に出るだけです。

必要なら、標準エラー出力をリダイレクトして、ファイルに保存してください。

Windows の例

-v オプションのみを指定した例

```
ArcsCmd -v 2>foo.log
```

12.3 ディレクトリ監視ソフトのログ

ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd のログは、ログファイルには書き込まれません。

ターミナル画面に出るだけです。

必要なら、標準エラー出力をリダイレクトして、ファイルに保存してください。

Windows と Linux の例

-v オプションのみを指定した例

```
ArcsDirMonitorCmd -v 2>foo.log
```

12.3.1 セッションログ

ディレクトリ監視ソフトは、セッションログを出力することができます。

通常はオフですが、オンにすれば、アプリケーションがうまく実行できなかったときに、エラーの原因を探る参考になります。

セッションログのオン・オフを切り替えるには、設定ファイル `ArcsDirMonitorCmd.yaml` の `file_session_logger` を `true` にします。

セッションログは、監視ディレクトリの `session_logs` ディレクトリに作られます。

ジョブ ID が `2026-01-09T18_37_22_631205_09_00` だとすると、

`2026-01-09T18_37_22_631205_09_00-stdout.log`

`2026-01-09T18_37_22_631205_09_00-stderr.log`

`2026-01-09T18_37_22_631205_09_00.log`

の3つのログが作られます。

セッションログは、監視対象に変換元ファイルが作られるたびに作られます。そのため、大量のログになるので、必要なときだけオンにして、通常はオフにします。

13. カスタマイズ

13.1 サーバースoftware ArcsSvr のカスタマイズ

サーバースoftware ArcsSvr の設定ファイルは、インストールディレクトリが ARCS だとすると、Linux では、

ARCS/server/conf/ArcsSvr.yaml

Windows では、

ARCS¥server¥conf¥ArcsSvr.yaml

にあります。

13.1.1 ポート番号

同じマシンで複数のサーバースoftwareを実行する場合は、ポート番号を変更する必要があります。

サーバーのポート番号は、サーバースoftware設定ファイル ArcsSvr.yaml にある各サーバーの port:によって変更できます。

サーバーのポート番号をカスタマイズしたら、忘れずに、クライアントソフト設定ファイル ArcsCmd.yaml のポート番号も変更してください。

13.1.2 TLS の設定

サーバーの TLS の設定は、サーバースoftware設定ファイル ArcsSvr.yaml の tls:, server_cert:, server_key:によって変更できます。

TLS を有効にするには、tls: true にして、サーバースoftwareの certs ディレクトリに鍵ファイルと証明書ファイルを入れてください。

サーバーの TLS の設定をカスタマイズしたら、忘れずに、クライアントソフト設定ファイル ArcsCmd.yaml の TLS の設定も変更してください。

13.1.3 インポートできる最大ファイル数、最大ファイルサイズ、最大トータルファイルサイズ

インポートできる最大ファイル数、最大ファイルサイズ、最大トータルファイルサイズの設定は、サーバースoftware設定ファイル ArcsSvr.yaml の max_num_files:, max_file_size:, max_total_file_size:によって変更できます。

13.2 クライアントソフト ArcsCmd のカスタマイズ

クライアントソフト ArcsCmd の設定ファイルは、インストールディレクトリが ARCS だとすると、Linux では、

ARCS/client/conf/ArcsCmd.yaml

Windows では、

ARCS¥client¥conf¥ArcsCmd.yaml

にあります。

13.2.1 クライアントの設定をカスタマイズしたら

- サーバーと同じマシンだが、ユーザ毎に別ディレクトリにクライアントソフトをインストールした
 - サーバーとは別マシンにクライアントソフトのみをインストールした
- といった場合は、カスタマイズしたクライアント設定ファイル ArcsCmd.yaml を ARCS ユーザに配って、設定が反映されるようにしてください。

13.2.2 ホスト名、IP アドレス、ポート番号

クライアントからアクセスするサーバーのホスト名、IP アドレス、ポート番号は、クライアントソフト設定ファイル ArcsCmd.yaml にある各サーバーの host: と port: によって変更できます。

13.2.3 TLS の設定

クライアントの TLS の設定は、クライアントソフト設定ファイル ArcsCmd.yaml の tls:, server_key: によって変更できます。

TLS を有効にするには、tls: true にして、クライアントソフトの certs ディレクトリに証明書ファイルを入れてください。

13.3 ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd のカスタマイズ

ディレクトリ監視ソフト ArcsDirMonitorCmd の設定ファイルは、インストールディレクトリが ARCS だとすると、

Linux では、

ARCS/client/conf/ArcsDirMonitorCmd.yaml

Windows では、
ARCS¥client¥conf¥ArcsDirMonitorCmd.yaml
にあります。

13.3.1 OSDC ではなく DHC を使う、あるいは、その逆

ディレクトリ監視ソフトは、変換元ファイルの拡張子によって、変換に使用するアプリケーションを決めています。

Word の変換は、OSDC と DHC が実行できますが、どちらか 1 つしか実行できません。
初期設定では、Word の拡張子「.docx」の場合は、OSDC で変換する設定になっています。
これを、DHC で変換するように変更するには、次のようにします。
ディレクトリ監視ソフトの設定ファイル ArcsDirMonitorCmd.yaml を変更します。

File extension mappings の Linux セクションの次の部分は、OSDC を使うようになっています。

```
### Special Note ###
#       If you want to use Docx to HTML, comment out this
#       and uncomment the Docx to HTML docx conversion instead.
#       .docx: run-arcs-script.sh OSDC-office2xxx.sh ${input_file} ${output_file} ${output_type}
#       ${shell_encoding} ${is_local}
```

.docx: run-arcs-script.sh OSDC-office2xxx.sh
の行を次のように、行頭に # を付けて、コメントにします。

```
### Special Note ###
#       If you want to use Docx to HTML, comment out this
#       and uncomment the Docx to HTML docx conversion instead.
#       .docx: run-arcs-script.sh OSDC-office2xxx.sh ${input_file} ${output_file} ${output_type}
#       ${shell_encoding} ${is_local}
```

初期設定では、DHC の部分は、コメントになっています。

```
### Special Note ###
#       The docx conversion is commented out to prioritize conversion by OSDC.
#       If you want to use Docx to HTML, uncomment this and comment out
```



```
# the ODSC docx conversion instead.
# .docx: run-arcs-script.sh DHC-docx2html.sh ${input_file} ${output_file} ${output_type}
# ${shell_encoding} ${is_local}
```

```
# .docx: run-arcs-script.sh DHC-docx2html.sh
```

のように、コメントになっている部分から、行頭の # を削除して、この行が有効になるようにします。

```
### Special Note ###
```

```
# The docx conversion is commented out to prioritize conversion by OSDC.
# If you want to use Docx to HTML, uncomment this and comment out
# the ODSC docx conversion instead.
# .docx: run-arcs-script.sh DHC-docx2html.sh ${input_file} ${output_file} ${output_type}
# ${shell_encoding} ${is_local}
```

同じ変更を、File extension mappings の Windows セクションについても行ってください。

逆に、DHC ではなく、OSDC で変換するには、上記の逆で、DHC の部分をコメントにし、OSDC の部分が有効になるようにします。

13.3.2 セッションログ

セッションログのオン・オフは、「ディレクトリ監視ソフトのログ：セッションログ」を参照してください。

13.3.3 出力ディレクトリを変更する

初期設定では、監視対象ディレクトリの下に、変換結果を入れる out_pdf, out_svg, out_html など各種ディレクトリが作られます。

ArcsDirMonitorCmd.yaml の output_root_dir に絶対パスを指定すると、そこを出力ディレクトリとして使います。

output_root_dir の下に作られる out_pdf, out_svg, out_html などの出力ディレクトリ名は、ディレクトリ監視ソフトの設定ファイル ArcsDirMonitorCmd.yaml の out_pdf_dir, out_svg_dir, out_html_dir などに変更できます。

13.3.4 ユーザ毎に出力ディレクトリを分ける

ユーザ毎に、出力ディレクトリを分けることもできます。

ARCS V1 管理者用マニュアル

ユーザ毎に、ディレクトリ監視ソフトの設定ファイル ArcsDirMonitorCmd.yaml を用意し、
use_user_name: を true にして、環境変数 ARCS_USER_NAME にユーザ名を指定してください。
起動するときは、-config で各ユーザ用の設定ファイルを指定して、ArcsDirMonitorCmd を複数起動してください。

この場合、監視対象ディレクトリに作られる出力先のディレクトリは、監視対象ディレクトリが
watch_dir, ユーザ名が user1 だとすると、

Linux では、

watch_dir/user1

Windows では、

watch_dir¥user1

の下に、変換結果を入れる out_pdf, out_svg, out_html などが作られます。

13.3.5 ユーザ毎に監視対象のディレクトリを分ける

「ユーザ毎に出力ディレクトリを分ける」に加えて、ユーザ毎に、監視対象のディレクトリを分けることは、運用上のメリットが大きいです。

ユーザ毎に監視対象のディレクトリを決めて、そこを監視対象にして、ディレクトリ監視ソフトを複数起動します。

ユーザ毎に、ディレクトリ監視ソフトの設定ファイル ArcsDirMonitorCmd.yaml を用意し、
use_user_name: を true にして、環境変数 ARCS_USER_NAME にユーザ名を指定してください。

起動するときは、-config で各ユーザ用の設定ファイルを指定して、ArcsDirMonitorCmd を複数起動してください。

この場合、監視対象ディレクトリに作られる出力先のディレクトリは、監視対象ディレクトリが
watch_user1, ユーザ名が user1 だとすると、

Linux では、

watch_user1/user1

Windows では、

watch_user1¥user1

の下に、変換結果を入れる out_pdf, out_svg, out_html などが作られます。

13.3.6 セッション ID で出力ディレクトリを分ける

ARCS では、変換のたびに、セッション ID というものが作られ、これを出力ディレクトリを分けるのに使えます。

ディレクトリ監視ソフトの設定ファイル ArcsDirMonitorCmd.yaml の use_session_id: を true にしてください。

そして、-config でその設定ファイルを指定して、ArcsDirMonitorCmd を起動してください。

この場合、監視対象ディレクトリに作られる出力先のディレクトリは、監視対象ディレクトリが watch_dir, セッション ID が sessionXXX だとすると、

Linux では、

watch_dir/sessionXXX

Windows では、

watch_dir¥sessionXXX

の下に、変換結果を入れる out_pdf, out_svg, out_html などが作られます。

「ユーザ毎に監視対象のディレクトリを分ける」と組み合わせた場合、監視対象ディレクトリが watch_user1, ユーザ名が user1, セッション ID が sessionXXX だとすると、

Linux では、

watch_user1/user1/sessionXXX

Windows では、

watch_user1¥user1¥sessionXXX

の下に、変換結果を入れる out_pdf, out_svg, out_html などが作られます。

13.3.7 変換の種類別に監視対象のディレクトリを分ける

PDF から PNG への変換は「PDFtoPNG」、Word から HTML への変換は「WORDtoHTML」など、変換の種類別にわかりやすいディレクトリ名を付けます。

変換の種類別に設定ファイルを用意します。

変換の種類別のディレクトリを監視対象にして、-config で変換の種類別の設定ファイルを指定して、ArcsDirMonitorCmd を複数起動してください。

13.3.8 グループ毎に監視対象のディレクトリを分ける

運用上、部や課といったグループ毎に監視対象のディレクトリを分けることも有効です。

これまで述べたカスタマイズと同じ要領です。

グループ毎にわかりやすいディレクトリ名を付けて、グループ毎に設定ファイルを用意します。

グループ毎のディレクトリを監視対象にして、-config でグループ毎の設定ファイルを指定して、ArcsDirMonitorCmd を、複数起動してください。

13.3.9 あれこれ組み合わせる

これまでに述べた

- 「出力ディレクトリを変更する」
- 「ユーザ毎に出力ディレクトリを分ける」

- 「ユーザ毎に監視対象のディレクトリを分ける」
- 「セッション ID で出力ディレクトリを分ける」
- 「変換の種類毎に監視対象のディレクトリを分ける」
- 「グループ毎に監視対象のディレクトリを分ける」

を組み合わせ、ユーザが使いやすく、運用もしやすい環境を作ってください。

13.3.10 アプリケーションをローカルで実行

同じマシンに、ARCS のディレクトリ監視ソフトとアプリケーションがインストールされている場合、ネットワークを使わず、つまり、Arcs のサーバーソフトやクライアントソフトを使わずに、ローカルでアプリケーションを実行できます。

そのためには、ディレクトリ監視ソフトの設定ファイル ArcsDirMonitorCmd.yaml の is_local: を false から true に変更し、-config でこの設定ファイルを指定して、ArcsDirMonitorCmd を起動してください。

13.3.11 ネットワークで監視対象のディレクトリを共有して使う

監視対象のディレクトリがネットワークで共有されている場合、共有されている監視対象のディレクトリに、変換したいファイルを、コピーや移動をすれば、変換を実行できます。

ファイルのコピーや移動は、Windows エクスプローラーのような GUI でも、ターミナルを使ったコマンドラインでも可能です。

ネットワークでディレクトリを共有する方法については、本マニュアルでは解説しませんので、書籍やインターネット上の他の解説を参照してください。

13.3.12 クライアントマシンにインストールせずに使う

同じマシンに、ARCS のディレクトリ監視ソフトとアプリケーションがインストールされていて、監視対象のディレクトリが、ネットワークで共有されている場合、クライアントマシンに ARCS をインストールせず、変換を実行できます。

「アプリケーションをローカルで実行」の設定をしておけば、クライアントマシンには、ARCS のサーバーソフトやクライアントソフトをインストールする必要もありません。

13.3.13 全部組み合わせると

これまでに述べた

「あれこれ組み合わせる」

ARCS V1 管理者用マニュアル

「アプリケーションをローカルで実行」

「ネットワークで監視対象のディレクトリを共有して使う」

「クライアントマシンにインストールせずに使う」

を組み合わせると、ARCS のディレクトリ監視ソフトとアプリケーションがインストールしてあるマシンで、運用を集中的に管理することも可能になります。

奥付け

ARCS V1 管理者用マニュアル

製品バージョン：1.0

発行日：初版 2026 年 2 月

発行元：東京都中央区東日本橋 2 丁目 1 番 6 号 アンテナハウス株式会社

Copyright ©2025 Antenna House, Inc.

本製品の Web マニュアルは、Microsoft Word で編集して、「Docx to HTML」で HTML に変換しました。

PDF のマニュアルは、同じ Word 文書から「Antenna House PDF Driver API」で PDF 出力しました。